

第十九講 神の義(三) 第三章二十三、四節の研究 (六月五日)

今律法の外に神の義が顯はれたとは二十一節の主張であつた、この神の義はキリストを信ずる者に區別なく與へらるゝとは二十二節の主張であつた、然り神の義は律法以外に現はれそしてキリストを信ずる者に與へらるゝ所のものである、何故に斯くの如き義が顯はれ斯くの如くにして義が與へらるゝか、この疑問に答ふるものが二十三、四節である、邦譯聖書には「そは人皆すでに罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、只キリストイエスの贖に賴りて神の恩恵を受け功なく義とせらるゝ也」とある、大體に於て原文の精神を捉へた譯ではあるが原文の直譯は左の如くである。

(23) そは人皆罪を犯したればなり

其れ故に神の榮に達せず

(24) 常に義とせられつゝ

たまもの
寶賜として

其の恩恵めぐみに由り

キリストイエスの贖によりて。

かく二十三、二十四節は短き句又は語を接ぎ合せたやうな文章である、殊に二十四節の如きは語と句を並べたと云ふまでのもので一の成文となつて居ない、上掲の直譯は、此兩節を假に六行に分けて記したのであるが、其第

一行は三字より、第二行は四字より、第三行及び第四行は共に一字より、第五行は三字より、第六行は七字より成つてゐる、(共に冠詞をも加算して)、全部合せて十九字である(二十三節は七字、二十四節は十二字)、かく短くときれとぎれの語を以て人類永遠の運命に關する大眞理が説かれたのである、そは恰も電報の如くである、語は簡單であるが意味は頗る深長である。

先づ二十三節を見るに其二十二節の理由を提示せしものたるや明である、二十二節は、神の義が信ずる者に與へらるゝ事を説く、即ち之自ら起す所の義にあらずして他より與へらるゝ所の義である、然らば何故に人は自ら義たるを要せずして他より義を與へらるゝに至つたのであるか、之に二十三節は答へて先づ云ふ「そは人みな罪を犯したればなり」と、既往に於て人は皆罪を犯したからであると云ふのである(二十三節の前半句の動詞は過去であつて後半句のそれは現在なるに注意せよ)、人は皆、誰人と雖も一人残らず既に罪を犯したのである、人は孰れも既定的に罪人である、故に律法の行に依て義たらんとするも不可能である、自ら義を立てゝ神の前に己れ義たらんとするも、そは既に破れし紙を本通りにせんとし溢れし水を舊に返さんとするが如く不可能である、故に斯る人類てふ者が義を得べき唯一の道は此義を神より與へられるより外にはないのである、即ち人は皆罪人なれば信仰の故に神より義とせらるゝ恩恵を受くる外ないのである、これ實に義ならざるに義とせらるゝ唯一の道である、かく二十三節は二十二節の説明を與へてゐるのである。

二十三節後半は「それ故に(人は)神の榮に達せず」と云ふ、「それ故に」原語 *καὶ* (カイ) は英語の *and* (アンド、そして) に當る、そしてアンドが種々の意味を傳ふると等しくカイも亦種々の意味を傳へる語である、

此場合の如きは「それ故に（その結果として）」の意を傳へて居ることと思ふ、即ち人は皆罪を犯したる故——犯したる結果として——神の榮に達しないと云ふのである、さらば「神の榮に達せず」とは何を意味するのであるか、之について種々の見方があるが其中の重なるものとして二つを擧げることができる、第一はキリスト再臨の時に於て神より榮を受くることを得ない、榮光を冠せられ榮化することを得ない事を意味すると見るのである、即ち人は皆罪を犯したる故當然滅亡すると云ふ意味になるのである、之は慥かに一の有力な見方であるが、文字上の故障のために之を採用し難しと做す人（例へばゴオデーの如き）があるのである。

茲に於て第二の見方が生れる、之に依れば人は元來神に肖せられて造られたる者である、創世紀一章二十七節は曰ふ「神その像の如くに人を創造り給へり、即ち神の像の如くに之を創造り……」と、故に人は元來神の榮を着て居るべきものである、然るにアダム先づ罪を犯し凡ての人亦彼にありて罪を犯せし故に此榮光は彼等を棄て去つたのである、彼等が神を棄つると共に此榮も亦彼等を棄てたのである、見よ彼等の面に現はるゝ悲寥の影を、見よ徨々相さまよへる彼等の力なき姿を、彼等は慥かに神の榮を失ひしものである、天より逐はれて地の泥に塗るゝに至りし者である、されば彼等は皆罪を犯したるが故に神の此榮を失つたのである、即ち人皆罪を犯したるが故に神の榮に達しないのである、これ第二の見方である。

邦譯聖書が「神の榮を受くるに足らず」と譯したのは第一の見方に依たのである、併し「受くるに足らず」の原語は達せず又は缺くと云ふ意味である故（英譯聖書に fall short of とあるのを見よ）第二の見方も優に成立するのである、ゴオデーの如きは此動詞の意味から見て第一の見方は到底成立しないと斷定して居る程

である。

第二の見方の熱心なる主張者たるゴオデーは云ふ「神の榮とは神自身より發出し來る所の——そして神と共に在る所の人に彼が與ふる所の——聖なる輝きである、神は之を與へ得る、そは彼自身がそれを持つて居り、それが彼の本性に屬せるものであるからである、初め彼が人を清き者且幸な者として創造した時には即ち此輝きの一部を人に送つたのであつた、そして人が無罪より聖淨に進むに従つて此輝きが益々光輝を増すやうにして置いたのである、然るに人は罪に陥つたため、その受けて居たもの及び之より受けんとするものを兩方共失つてしまつた、王位を失つた王である、王冠が頭より落ちてしまつたのである」と。

第一の見方と第二の見方の中いづれが正しいかは容易に定め難い、即ち「榮に達せず」とは後に起る滅亡を指すか或は今在る所の墮落の状態を指すか明かでない、けれども罪を犯す事その事が人を神の榮より遠ざけるものである事は極めて明瞭である、人は罪を犯した、そのために本具の榮を喪失したのである、或は人は罪を犯した、そのために後に受くべき榮を受け得ないのである、これ實に人間の實狀である、何か或者が此狀態を破らない限り人は此悲惨なる運命より解かれ得ないのである。

人は皆罪を犯して神の榮を遠ざかつて居る、人は律法の行を以て神の前に己を義とすることは出来ない、故に律法の外に今神の義が顯はれた、神はキリストを信ずる者に其信仰の故に義を賜ふ、即ち人はキリストを信ぜれば其ために罪人たるまゝにて義とせらるゝのである、これ二十一—二十三節の説きし所であつた、然る時は何故に斯かる恩恵の救が人に臨むに至つたかと云ふ疑問が當然茲に生起せざるを得ない、我等は此疑問に答ふるもの

として二十四—二十六節を見るのである。

併し乍ら此の二十四—二十六節は文章としては餘りに簡潔に過ぎて、たゞ若干の句を並べただけのものである、パウロは自己の義とせられし實感を回想して感謝の念に堪へ難く、感激のあまり心より發する純なる叫びを其儘に並べ記したのであらう、故に其包む生命力は外装たる不備の文字を破つて躍り出で、居るのである、恰も甘露の一滴又一滴天より降るが如く、一語一語、一句一句に、言ひ難き力と生命とが籠つてゐる、之を解するためには意味を補足する外ないのであるが、如何やうに補足されても意味の中心點には大差ないのである。

先づ二十四節を見るに第一に「義とせられつゝ」の語が立つ、英語にては *being justified* と二字に譯してあるが原語は δικαιωμένοι (ディカイウメノイ) の一字である、これ文法上の謂ゆる現在分詞である、故に「常に」といふ意味を含んでゐる、されば「常に義とせられつゝ」と譯して始めて原意を充分に表明したことになるのである、僅かに一語であるが其中に限りなき恩恵と慰藉とを我等は感ずる、我等は常に義とされつゝある、我等の義とせられるのは一時の事に限られないで繼續する事である、我等は單に悔改めし時又は十字架の贖ひの信ぜられた其時に一度義とせられて已むのではない、常に義とせられつゝ彼時にまで至るのである。

我等は悔改めて神に歸するに至つた後と雖も決して全き聖淨無罪に達するものではない、波瀾重疊は實に信仰生活の常の姿である、比較的聖きこともあるが罪に陥りて悲む事も亦度々である、一度誘ひに克ちて喜びに溢るゝも、直ちに又之れに負けて深き悲歎と重き憂鬱に襲はれる、罪を犯して後はいたく之を悔ゆる、しかし悔いし罪を又忽ち行ふに至る、我等の信仰生活に於て理想と實際との相去ることは千里も遙ならぬのである、これ基督信

者特有の苦惱である、そのために自己を偽善者と見て大に失望し、其極遂に信仰を棄つる者も決して少くない、或人は悔改めし後の生涯に於て人は決して罪を犯さないと云ふ、しかし不幸にして是れ我等の實際の経験と相反してゐる、人は信仰に入りても常に罪を犯しつゝあるのである、故に「常に義とせられつゝ」行く必要が起るのである、人の信仰生活に於て爲し得る事は絶對的に罪を犯さないことではない、十字架のキリストを仰ぐことである、そして此信仰の故に人は「常に義とされつゝ」行くのである、人は常に罪を犯しつゝ常に赦されつゝ行くのである、故に「常に義とせられつゝ」即ちデイカイウメノイの一語は、罪に悩める基督信者にとりては大なる慰めの語である、かくして初めて我等に眞の安心が臨むのである、一度義とせられしだけにて後は自ら義たねばならぬと云ふ事ならば、我等の生涯は重荷の壓迫に潰え果つるだけのものである、常に義とせられつゝ進み行くは此上なき恩恵、類例なき慰藉である。

かく云ふ時は人は如何に多く罪を犯しても宜いと云ふことになつて、其結果は只人を放縱に陥れるのみである、と云ふ人がある、けれども之は此事を實驗しては味はざる人の抗議である、此事は或は偽りの信者にその放縱を辯護する好辭柄となるかも知れない、しかしそは自から別箇の問題である、苟も眞に悔改めたる、そして主の十字架を負ひて従はんとしつゝある誠實なる信徒に取つては、これが健全にして且強力なる慰めを與ふること言ふ迄もない。

二十四節の第二語は「賚賜たまふとして」である、英譯聖書は之を freely (無代價にて、價なくして) と譯し、邦譯聖書は「功いさめなくて」と譯してゐる、この原語 δωρεαν (ドーレア) は、 δωρεα (ドーレア) 即ち「賚賜」と

云ふ語の一變化であつて、「賚賜として」を本來の意味とする語である、賚賜である故に無代價で又功なくして得ることになるが「賚賜として」が本來の意味である、即ち神よりの義は「賚賜として」與へらるゝものである、報ではない、報酬でも給料でもない、たゞ賜として子が何かを親より貰ふ如くに貰ふのである、即ち貰ひに行きさへすれば自由に與へらるゝ所のものである、實に絶對の恩恵、何等人の功に依らず、來る者の汲むに任する所の生命の泉なる「神の義」である、但し信仰てふ汲器を持ち來らざる者は此泉より生命の水を汲取るを得ない、故に人々よ忘るゝ勿れ汲器を携へて來ることを、如何に「賚賜として」無料にて與へらるゝ生命の水なりとも、汲器なき者は之を我有とするを得ないのである。

この「賚賜として」の原語ドーレアンは新約聖書に於て八回ほど用ひられてゐる、そして其多くは「價なしに」と譯してある、かの馬太傳十章八節にある「汝等價なしに受けたれば、又價なしに施すべし」も此語を用ひてゐる、之は賚賜として受けたれば亦賚賜として與へよとの意である、其他コリント後書十一章七節、テサロニカ後書三章八節、默示錄二十一章六節、同第廿二章十七節等に何れも「價なしに」と譯してある、これ皆「賚賜として」の意である、「願ふ者は價なしに生命の水を飲むべし」とある如き其一例である。

「賚賜として」の次ぎには「其の恩恵により」の句がある、「神の恩恵により」の意である、賜物を與ふるにも種々の意味がある、人の世に於て行はるゝ賜物の賦與は、多くは之を受くべき或理由ある場合に限らるゝのである、家臣が或功を立てたため君公より或賜物を與へらるゝ如き、學生が成績の優良なるため、賞與に與る如き——此種の場合が人間世界には多いのである、然るに賜物として與へらるゝ神の義は全く「恩恵として」與へらるゝ

のである、神の恩恵。これ即ち此の賜物の與へらるゝ意味である、神は其義を義ならざる者に與へ賜ふ、恩恵として之を與ふるが神の神たる所以である、親は其の子に對するに専ら恩恵を以てす、これ愛の故である、神は罪あるものに對するに専ら恩恵を以てす、これ愛の故である、彼は此親心を以て人に臨み給ふ、ただ恩恵より出でて賜物として義を人に與へ給ふ、その為に人は義ならざるに義とせられて神の前に立つ事が出来る、人は「賚賜として其の恩恵によりて」常に義とせられつゝ行くと、これパウロの強く主張した全恩恵の福音である。

二十四節の最後の句は「キリストイエスの贖に依りて」である、人は何故に價なくて唯の恩恵に由りて義とせらるゝかとは當然此際起るべき疑問である、この至大の特權が人に與へらるゝは何故か、あまり良過ぎて信ずるに難しと思はるゝ程に之は人の思に過る絶大の恩恵である、此恩恵の根柢如何、之に答ふるが此の一句である、

「キリストイエスの贖に依りて」と言ふ、此人が義ならざるに義とせらるゝ事の根柢である、即ちキリストの贖あるに依りて人は唯信仰のみを以て常に義とせられつゝ行くのである、キリストの十字架を萬民の罪の贖と見るは實に福音主義の根柢として缺くべからざる者である、今や新しき神學が之を舊思想として排しつゝあるにも係らず、贖罪其ものゝ貴重なる實は永へに魂の傷を醫やす靈藥として立つのである、神の獨子の貴き血が萬民の爲に流され、其の死が萬民の罪を一身に擔ひての贖の死であればこそ、罪ある我等も罪なきものとして見られ、

義ならざる我等も義なる者と見做さるゝのである、さればキリストの贖罪は實に福音の根柢である、これ實にパウロ主義の基調であるのみならず、他の使徒たちも之を信じ且説き、又當時の信者も皆之を信じた、實に贖罪は新約の福音其の者の根柢に横たはるゝ一大事實である、天の高きが如く地の廣きが如く此一事は明らかである。

今や律法とは別に神の義が現されたというのは二十一節の主張であつた。この神の義はキリストを信じる者に区別なく与えられるというのは二十二節の主張であつた。そうである。神の義は律法以外に現れ、そしてキリストを信じる者に与えられるものである。なぜこのような義が現れ、このようにして義が与えられるのか。この疑問に答えるものが二十三、二十四節である。邦訳聖書には「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」とある。大体において元の言葉の精神をとらえた訳ではあるが、元の言葉の直訳は次の通りである。

(23) それは人は皆罪を犯したからである

それゆえに神の栄光に達しない

(24) 常に義とされつつ

賜物として

その恵みにより

キリスト・イエスの贖いによつて。

このように二十三、二十四節は短い句や語をつなぎ合わせたような文章である。特に二十四節のようなものは語

と句を並べたというだけのもので、一つのまとまった文章になっていない。上に掲げた直訳は、この両節を仮に六行に分けて記したものであるが、その第一行は三語から、第二行は四語から、第三行および第四行はともに一語から、第五行は三語から、第六行は七語から成っている（ともに冠詞をも加算して）。全部合わせて十九語である（二十三節は七語、二十四節は十二語）。このように短くとぎれとぎれの語によって人類永遠の運命に関する大きな真理が説かれたのである。それはまるで電報のようである。語は簡単であるが意味は非常に深い。

まず二十三節を見るに、それが二十二節の理由を提示したものであることは明らかである。二十二節は、神の義が信じる者に与えられることを説く。すなわち、これ自身が起こすところの義ではなく、他から与えられるところの義である。それならば、なぜ人は自ら義となることを必要とせず、他から義を与えられるに至ったのであるか。これに二十三節は答えてまず言う。「それは人は皆罪を犯したからである」と。過去において人は皆罪を犯したからであると言うのである（二十三節の前半句の動詞は過去であって、後半句のそれは現在であることに注意せよ）。人は皆、誰一人として残らずに罪を犯したのである。人は誰もが既定の事実として罪人である。ゆえに律法の行いによって義となろうとするのも不可能である。自ら義を立てて神の前に自分が義となろうとするのも、それはすでに破れた紙を元の通りにしようとし、こぼれた水を元に戻そうとするかのように不可能である。ゆえにこのような人類という者が義を得るべき唯一の道は、この義を神から与えられるより外にはないのである。すなわち人は皆罪人であるから、信仰のゆえに神から義とされる恵みを受ける外はないのである。これこそ実に義でないのに義とされる唯一の道である。このように二十三節は二十二節の説明を与えているのである。

二十三節後半は「それゆえに（人は）神の栄光に達しない」と言う。「それゆえに」の原語 *οτι*（カイ）は英語の *and*（アンド、そして、の意味）に当たる。そしてアンドが様々な意味を伝えるのと等しく、カイもまた様々な意味を伝える語である。この場合のようなものは「それゆえに（その結果として）」の意味を伝えていることと思う。すなわち人は皆罪を犯したゆえに―犯した結果として―神の栄光に達しないと言うのである。それでは「神の栄光に達せず」とは何を意味するのであるか。これについて様々な見方があるが、その中の主なものとして二つを挙げることができる。第一はキリスト再臨の時にいて神から栄誉を受けることができない、栄光を冠せられ栄化されることができないことを意味すると見るのである。すなわち人は皆罪を犯したゆえ当然滅亡するという意味になるのである。これは確かに一つの有力な見方であるが、文字上の不都合のためにこれを採用しがたいとする人（例えばゴデのような人）がいるのである。

ここに第二の見方が生まれる。これによれば人は元々神に似せて造られた者である。創世記一章二十七節は言う。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された」と。ゆえに人は元々神の栄光をまとうべきものである。しかるにアダムがまず罪を犯し、すべての人もまた彼にあって罪を犯したゆえに、この栄光は彼らを捨て去ったのである。彼らが神を捨てるとともに、この栄光もまた彼らを捨てたのである。見よ、彼らの面に現れる悲しみの影を。見よ、さまよい歩く彼らの力なき姿を。彼らは確かに神の栄光を失ったものである。天から追われて地の泥にまみれるに至った者である。されば彼らは皆罪を犯したがゆえに神のこの栄光を失ったのである。すなわち人皆罪を犯したるがゆえに神の栄光に達しないので

ある。これが第二の見方である。

以前の訳が「神の栄誉を受けるに足りず」と訳したのは第一の見方に拠ったのである。しかし「受けるに足りず」の原語は達しない、または欠くという意味であるから（英訳聖書に *fall short of* とあるのを見よ）、第二の見方も十分に成立するのである。ゴデーのような人はこの動詞の意味から見て、第一の見方は到底成立しないと断定しているほどである。

第二の見方の熱心な主張者であるゴデーは言う。「神の栄光とは神自身から発し来るものであり―そして神とともにある人に彼が与えるところの―聖なる輝きである。神はこれを与えることができる。それは彼自身がそれを持つており、それが彼の本性に属するものであるからである。初め彼が人を清い者、かつ幸せな者として創造した時には、すなわちこの輝きの一部を人に送ったのであった。そして人が無罪から聖なる清さに進むに従って、この輝きがますます光輝を増すようにしておいたのである。しかるに人は罪に陥ったため、その受けていたもの、およびこれから受けようとするものを両方とも失ってしまった。王位を失った王である。王冠が頭から落ちてしまったのである」と。

第一の見方と第二の見方の中、いずれが正しいかは容易に定めがたい。すなわち「栄光に達せず」とは後に起きる滅亡を指すか、あるいは今あるところの墮落の状態を指すか明らかでない。けれども罪を犯すことそのことが、人を神の栄光から遠ざけるものであることは極めて明白である。人は罪を犯した。そのために本来備わっていた栄光を喪失したのである。あるいは人は罪を犯した。そのために後に受けるべき栄光を受け得ないのである。

これこそ実に人間の実状である。何かがこの状態を破らない限りは、人はこの悲惨な運命から解かれ得ないのである。

人は皆罪を犯して神の栄光を遠ざかっている。人は律法の行いをもって神の前に己を義とすることはできない。ゆえに律法とは別に今、神の義が現された。神はキリストを信じる者にその信仰のゆえに義を賜る。すなわち人はキリストを信じれば、そのために罪人のままで義とされるのである。これこそ二十一節から二十三節の說いたところであつた。そうである時は、なぜこのような恵みの救いが人に臨むに至ったかという疑問が当然ここに起きざるを得ない。私たちはこの疑問に答えるものとして二十四節から二十六節を見るのである。

しかしながら、この二十四節から二十六節は文章としてはあまりに簡潔に過ぎて、ただいくつかの句を並べただけのものである。パウロは自己の義とされた実感を回想して感謝の念に堪えがたく、感激のあまり心から発する純粹な叫びをそのまま並べ記したのであらう。ゆえにそこに包まれる生命力は、外装である不備の文字を破つて躍り出ているのである。まるで甘露の一滴また一滴が天から降るかのように、一語一語、一句一句に、言い難い力と生命とがこもっている。これを理解するためには意味を補足する外ないのであるが、どのように補足されても意味の中心点には大差ないのである。

まず二十四節を見るに、第一に「義とされつつ」の語が立つ。英語においては being justified と二語に訳してあるが、原語は δικαιούμενοι (デイカイウーメノイ) の一語である。これは文法上のいわゆる現在分詞である。ゆえに「常に」という意味を含んでいる。されば「常に義とされつつ」と訳して初めて元の意味を十分に

表明したことになるのである。わずかに一語であるが、その中に限りない恵みと慰めとを私たちは感じる。私たちは常に義とされつつある。私たちの義とされるのは一時のことに限られないで継続することである。私たちは単に悔い改めた時、または十字架の贖いの信じられたその時に一度義とされて終わるのではない。常に義とされつつあの時にまで至るのである。

私たちは悔い改めて神に立ち返るに至った後といえども、決して全き聖なる清さや無罪に達するものではない。波瀾万丈は実に信仰生活の常の姿である。比較的清いこともあるが、罪に陥って悲しむこともまた度々である。一度誘惑に勝って喜びに溢れるも、直ちにまたこれに負けて深い悲嘆と重い憂鬱に襲われる。罪を犯した後はひどくこれを悔いる。しかし悔いた罪をまたまち行うに至る。私たちの信仰生活において理想と実際との相去ることは、極めて遠いのである。これこそキリスト信者特有の苦悩である。そのために自己を偽善者と見て、大いに失望し、その極みついに信仰を捨てる者も決して少なくない。ある人は悔い改めた後の生涯においては、人は決して罪を犯さないという。しかし不幸にしてこれは私たちの実際の経験と相反している。人は信仰に入っても常に罪を犯しつつあるのである。ゆえに「常に義とされつつ」行く必要が起きるのである。人の信仰生活においてなし得ることは、絶対的に罪を犯さないことではない。十字架のキリストを仰ぐことである。そしてこの信仰のゆえに人は「常に義とされつつ」行くのである。人は常に罪を犯しつつ、常に許されつつ行くのである。ゆえに「常に義とされつつ」すなわちディカイウメノイの一語は、罪に悩めるキリスト信者にとっては大きな慰めの語である。こうして初めて私たちに真の安心が臨むのである。一度義とされただけで後は自ら義であらね

ばならぬということならば、私たちの生涯は重荷の圧迫に潰え果てるだけのものである。常に義とされつつ進み行くは、この上ない恵みであり、類例のない慰めである。

このように言う時は、人はどれほど多く罪を犯しても良いということになって、その結果はただ人を放縱に陥れるのみであると言う人がいる。けれどもこれはこのことを実験しては味わわない人の抗議である。このことはあるいは偽りの信者にその放縱を弁護する格好の言い訳となるかもしれない。しかしそれはおのずから別個の問題である。いやしくも真に悔い改めた、そして主の十字架を背負って従おうとしつつある誠実な信徒にとっては、これが健全にして、かつ強力な慰めを与えることは言うまでもない。

二十四節の第二語は「賜物として」である。英訳聖書はこれを *freely*（無代価にて、価なくして）と訳し、以前の訳は「功なくして」と訳している。この原語 *doxan*（ドーレアン）は、*doxa*（ドーレア）すなわち「賜物」という語の一変化であつて、「賜物として」を本来の意味とする語である。賜物であるゆえに無代価で、また功績なくして得ることはなるが、「賜物として」が本来の意味である。すなわち神からの義は「賜物として」与えられるものである。報酬ではない。報酬でも給料でもない。ただ賜物として子が何かを親から貰うかのように貰うのである。すなわち貰いに行きさえすれば自由に与えられるところのものである。実に絶対の恵みであり、何ら人の功績によらず、来る者の汲むに任せるところの生命の泉なる「神の義」である。ただし信仰という汲み器を持ち来らない者は、この泉より生命の水を汲み取ることができない。ゆえに人々よ、忘れることなかれ、汲み器を携えて来ることを。いかに「賜物として」無料にて与えられる生命の水なりとも、汲み器なき者はこれを

我がものとすることができないのである。

この「賜物として」の原語ドーレアンは新約聖書において八回ほど用いられている。そしてその多くは「価なしに」と訳してある。あのマタイの福音書十章八節にある「病人を癒やし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出さない。あなたがたはただで受けたのですから、ただで与えなさい」もこの語を用いている。これは賜物として受けたのであるから、また賜物として与えよとの意味である。その他コリント人への手紙第二十一章七節、テサロニケ人への手紙第二三章八節、黙示録二十一章六節、同第二十二章十七節等にいずれも「価なしに」あるいはそれに準じて訳してある。これらは皆「賜物として」の意味である。「願う者は価なしに生命の水を飲むべし」とあるがごときはその一例である。

「賜物として」の次には「その恵みにより」の句がある。「神の恵みにより」の意味である。賜物を与えるにも様々な意味がある。人の世において行われる賜物の付与は、多くはこれを受けるべきある理由ある場合に限られるのである。家臣がある功績を立てたために主君よりある賜物を与えられるがごとく、学生が成績の優良なるために賞与にあずかるがごとくこの種の場合が人間世界には多いのである。しかるに賜物として与えられる神の義は、全く「恵みとして」与えられるのである。神の恵み、これすなわちこの賜物の与えられる意味である。神はその義を義でない者に与え賜う。恵みとしてこれを与えるのが神の神たるゆえんである。親はその子に対するに専ら恵みをもってする。これは愛のゆえである。神は罪あるものに對するに専ら恵みをもってする。これは愛のゆえである。彼はこの親心を以て人に臨み給う。ただ恵みより出でて賜物として義を人に与え給う。そのため

に人は義でないのに義とされて神の前に立つことができる。人は「賜物としてその恵みによりて」常に義とされつつ行くと、これこそパウロの強く主張した全き恵みの福音である。

二十四節の最後の句は「キリスト・イエスによる贖いを通して」である。人はなぜ価なくて、ただの恵みによって義とされるのかとは、当然この際起きるべき疑問である。この至大の特権が人に与えられるのはなぜか。あまりに良すぎて信じがたいと思われるほどに、これは人の思いを超える絶大な恵みである。この恵みの根底は何か。これに答えるのがこの一句である。「キリスト・イエスによる贖いを通して」と言う。これが人の義でないのに義とされることの根底である。すなわちキリストの贖いがあることによつて、人はただ信仰のみをもつて常に義とされつつ行くのである。キリストの十字架を万民の罪の贖いと見ることは、実に福音主義の根底として欠くべからざるものである。今や新しい神学がこれを古い思想として退けつつあるにもかかわらず、贖罪そのものの貴重なる実は永遠に魂の傷をいやす靈藥として立つのである。神の独り子の貴い血が万民のために流され、その死が万民の罪を一身に背負つての贖いの死であればこそ、罪ある私たちも罪なきものとして見られ、義でない私たちも義なる者と見なされるのである。さればキリストの贖罪は実に福音の根底である。これ実にパウロ主義の基調であるのみならず、他の使徒たちもこれを信じ、かつ説き、また当時の信者も皆これを信じた。実に贖罪は新約の福音そのものの根底に横たわる一大事実である。天の高いがごとく地のお広いがごとく、この一事は明らかである。